

①9 牟田八重さん

【親の念願・親の遺訓】

ある夜中に、戸畑のカフェから電話。法話に来て下さいませんか。十二時過ぎて困るなあとは思ったが、母から小さい時に聞かされた法話がある。ある御大徳が厠に行こうとするとき、頭から血を流し異臭のある男が、法話をしてくださいませんかと頼む。便所から出て話すと言って入って入っている間に、叫び声を挙げて消えたそうだが、地獄から僅かな時間を貰って人の世に法話を聞きに来ているのだから、坊さんが酒を飲んだり、花札遊びなどして遊んでいる間に、同行は三悪道に堕ちるのだから、法話を聞きたい人があったら、何は捨ておいても直に法話をせねばならないと言われたことを思い出して直に行くことと返事をしたら「車で御迎えに行きます」雪の中を走って行く。肺炎で危篤「何が聞きたいですか」幽かな声で「お礼が言いたいのです。私は八幡の三等料理屋にいましたが、叔母から、お前は世も地獄、未来も地獄だから、宗教を聞くより他に悪道を遁れる道が無いと聞かされ、お宅に二度伺いました。一度はお留守、一度は京都から今帰られて入浴中、ちよつと待って下さいと言われたが、私風情なものがと卑下して帰りました。どこのお説教を聞かして頂いても、死んだ先のお浄土の有難いことを言われるので、現在の地獄の私には縁の遠いものですから、先生のお話は私の業魂を判然教えてくださって、それと本願が一体にならねば助かっていない。どこで助かるのだと必死になり、とうとう先生にお手紙を差上げました」

「名前」 「牟田八重です」

「妙な名前だから覚えてるが、何と返事したね」

「後生が苦になつてこそ任せです。窮すれば通ずる世界があります。ほんとに堕ちたときでなければ、本心に助かった自覚はつきませぬ。聞いたも知ったも覚えたも、みな自力の機軸が握っているのですから、すべてが尽きた時が、すべてが

生かされた無我の世界に出れるのですと、何回繰り返して読んでも覚えられない。落ちともないから聞いているのに。本当に落ちねば助からないとは、無慈悲な信仰ではないかと、どれ程恨んで、呪うたかしれません。仏様を呪い、善知識を呪うている心が悪魔であった。私が落ちなくて誰が落ちるものかと、往生の望みの綱が切れた時、無間のどん底に投込まれた思いがしたとき、唯ぞーの勅命が雷のように聞こえ、飛び上がって 親様おやさま、これが唯でございませうか。私の思慮分別のすべてが尽きたとき、私のすべてを無条件で摂取してくださいませうか、と歡喜と懺悔で泣いたり笑うたり一晩中睡れませんでした。それからは何を見ても御恩ごおんと喜ばしていただき、あの苦しみを再び繰り返してみようとしても、にこにこ心が底から噴き上げる喜びでございませう。いよいよ死期も近づきましたが、このまま死んでは御礼を言うときがありませんので、夜中御招きして申訳がありません」

「隣にいる坊やは、あなたの子供かい」

「主人の子供さんです。このカフェは奥さんが夏に死なれて、主人が応召で坊ちゃんが一人残っています、使用人七人で店を守っているのです。私はもう駄目ですが、死にともありません」

「三十ぐらいで死にたいことがあるものか」と言いましたら、「こんな腐った身体には未練はありませんが、御恩報謝が爪の垢ほどもできていないのが残念で、死にともないのです」「いいよ、還相廻向で、また出て来て御恩報謝をすればよい」と言いますと、「和上さま、身分に相違がありますから、畏れ多いことではありますが、貴殿さまとわたしは兄弟でございませうなあ」「その通りだ」「私は死んでも、あなたをお護りいたしますから、衆生済度をして下さいませよ。ああこれで安心した。いつでもお浄土へ帰らして頂きます」と喜んだが、

「河原にもこぼれ種かや美人草」と言う句がありますが、智者や学者は法門をいじくり廻して如何に他力のように説明するか、腐心しているが、そんな高原の陸地には蓮は生えず、卑湿の汚泥に蓮が生ずるとは、尊いことです。仏様は、どんな姿で教化

しておいでのなるかわかりません。

智者や学者の風をした仏さまもありましょうが、頑張る姑さんとして、信仰の鞭を嫁さんにあてている仏さまもあれば、邪見な嫁となつて姑さんに、この世でさえも辛いのに未来はどれほどの苦痛かわからないから、足腰の達者な間に真剣に求道しなさいと、激励する仏さまもあると見なければなりません。順縁逆縁どちらにしても、あなたを開覚せしむる方が仏さまの再来です。

(『親の念願・親の遺訓』二九七頁より)